

日本の名作名文ハイライト

李陵

中島敦

表現よみ 渡辺知明

出所 中島敦&梶井基次郎☆表現よみの世界

<http://www.voiceblog.jp/kajiisekai/>

teabreak 編

李陵

中島敦

※ 赤字部分は、読まれていません。

●冒頭部分

漢の武帝の天漢二年秋九月、騎都尉・李陵は歩卒五千を率い、辺塞遮虜※を發して北へ向かった。阿爾泰山脈の東南端が戈壁沙漠に没せんとする辺の礪确たる丘陵地帯を縫って北行すること三十日。朔風は戎衣を吹いて寒く、いかにも万里孤軍来たるの感が深い。漠北・浚稽山の麓に至って軍はようやく止營した。すでに敵匈奴の勢力圏に深く進み入っているのである。秋とはいっても北地のこととて、苜蓿も枯れ、榆や檉柳の葉ももはや落ちつくしている。木の葉どころか、木そのもののさえ宿營地の近傍を除いては、容易に見つからないほどの、ただ砂と岩と磧と、水のない河床との荒涼たる風景であった。極目人煙を見ず、まれに訪れるものとしては広野に水を求める羚羊ぐらいのものである。

突兀と秋空を画る遠山の上を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても、しかし、将卒一同誰一人として甘い懷郷の情などに唆られるものはない。それほどに、彼らの位置は危険極まるものだったのである。

騎兵を主力とする匈奴に向かつて、一隊の騎馬兵をも連れずに歩兵ばかり馬に跨がる者は、陵とその幕僚数人にすぎなかつた、(で奥地深く侵入することからして、無謀の極みというほかはない。その歩兵も僅か五千、絶えて後援はなく、しかもこの浚稽山は、最も近い漢

塞の居延からでも優に一千五百里（中国里程）は離れている。統率者李陵への絶対的な信頼と心服とがなかったならとうてい続けられるような行軍ではなかった。

毎年秋風が立ちはじめると決って漢の北辺には、胡馬に鞭うった剽悍な侵略者の大部隊が現われる。辺吏が殺され、人民が略められ、家畜が奪略される。

五原・朔方・雲中・上谷・雁門などが、その例年の被害地である。大將軍衛青・嫪騎將軍霍去病の武略によって一時漠南に王庭なしといわれた元狩以後元鼎へかけての数年を除いては、ここ三十年來欠かすことなくこうした北辺の災いがつづいていた。霍去病が死んでから十八年、衛青が没してから七年。※野侯趙破奴は全軍を率いて虜に降り、光祿勳徐自為の朔北に築いた城障もたちまち破壊される。全軍の信頼を繋ぐに足る將帥としては、わずかに先年大宛を遠征して武名を挙げた一師將軍李広利があるにすぎない。

その年——天漢二年夏五月、——匈奴の侵略に先立って、二師將軍が三万騎に將として酒泉を出た。しきりに西辺を窺う匈奴の右賢王を天山に撃とうというのである。武帝は李陵に命じてこの軍旅の輜重のことに当たらせようとした。未央宮の武台殿に召見された李陵は、しかし、極力その役を免ぜられんことを請うた。陵は、飛將軍と呼ばれた名將李広の孫。つとに祖父の風ありといわれた騎射の名手で、数年前から騎都尉として西辺の酒泉 張掖に在って射を教え兵を練っていたのである。年齢もようやく四十に近い血氣盛りとあっては、輜重の役はあまりに情けなかったに違いない。臣が辺境に養うところの兵は皆荆楚の一騎当千の勇士なれば、願わくは彼らの一隊を率いて討って出で、側面から匈奴の軍を牽制したいという陵の嘆願には、武帝も領

くところがあった。しかし、相つづく諸方への派兵のために、あいにく、陵の軍に割くべき騎馬の余力がないのである。李陵はそれでも構わぬといった。確かに無理とは思われたが、輜重の役などに当てられるよりは、むしろ己のために身命を惜しまぬ部下五千とともに危うきを冒すほうを選びたかったのである。臣願わくは少をもって衆を撃たんとといった陵の言葉を、派手好きな武帝は大いに欣んで、その願いを容れた。李陵は西、張掖に戻って部下の兵を勅するとすぐに北へ向けて進發した。当時居延に屯していた彊弩都尉路博徳が詔を受けて、陵の軍を中道まで迎えに出る。そこまではよかったのだが、それから先がすこぶる拙いことになってきた。元来この路博徳という男は古くから霍去病の部下として軍に従い、邈離侯にまで封ぜられ、ことに十二年前には伏波將軍として十万の兵を率いて南越を滅ぼした老将である。その後、法に座して侯を失い現在の地位に墮されて西辺を守っている。年齢からいっても、李陵とは父子ほどに違う。かつては封侯をも得たその老将がいまさら若い李陵ごときの後塵を拝するのがなんととしても不愉快だったのである。彼は陵の軍を迎えると同時に、都へ使いをやって奏上させた。今まさに秋とて匈奴の馬は肥え、寡兵をもつてしては、騎馬戦を得意とする彼らの鋭鋒にはいささか当たりがたい。それゆえ、李陵とともにここに越年し、春を待つてから、酒泉・張掖の騎各五千をもつて出撃したほうが得策と信ずるという上奏文

である。もちろん、李陵はこのことをしらない。武帝はこれを見るとひどく怒った。李陵が博徳と相談の上での上書と考えたのである。わが前ではあのとおり広言しておきながら、いまさら辺地に行つて急に怯気づくとは何事ぞという。たちまち使いが都から博徳と陵の所に飛ぶ。李陵は少をもつて衆を撃たんとわが前で広言したゆえ、汝はこれと協力する必要はない。今匈奴が西河に侵入したとあれば、汝はさっそく陵を残して西河に馳せつけ敵の道を遮れ、というのが博徳への詔である。李陵への詔には、ただちに漠北に至り東は浚稽山から南は竜勒水の辺までを偵察觀望し、もし異状なくんば、※浞野侯の故道に従つて受降城に至つて士を休めよとある。博徳と相談してのあの上書はいったいなんたることぞ、という烈しい詰問のあつたことは言うまでもない。寡兵をもつて敵地に徘徊することの危険を別としても、なお、指定されたこの数千里の行程は、騎馬を持たぬ軍隊にとつてははなはだむずかしいものである。徒歩のみによる行軍の速度と、人力による車の牽引力と、冬へかけての胡地の気候とを考えれば、これは誰にも明らかであつた。

武帝はけつして庸王ではなかつたが、同じく庸王ではなかつた隋の煬帝や始皇帝などと共通した長所と短所とを有つていた。愛寵比なき李夫人の兄たる二師將軍にしてからが兵力不足のためいったん、大宛から引揚げようとして帝の逆鱗にふれ、玉門関をとじられてしまった。その大宛征討も、たかだか善馬がほしいからとて思い立たれたものであつた。帝が一度言出したら、どんな我ままでも絶対に通されねばならぬ。まして、李陵の場合は、もともと自ら乞うた役割でさえある。ただ季節と距離とに相当に無理な注文があるだけで、躊躇すべき理由はどこにもない。彼は、かくて、「騎兵を伴わぬ北征」に出たのであつた。

浚稽山の山間には十日余留まった。その間、日ごとに斥候を遠く派して敵状を探ったのはもちろん、付近の山川地形を刺すところなく図に写しとって都へ報告しなければならなかった。報告書は麾下の陳歩樂という者が身に帯びて、単身都へ馳せるのである。選ばれた使者は、李陵に一揖してから、十頭に足らぬ少数の馬の中の一匹に打跨ると、一鞭あてて丘を駈下りた。灰色に乾いた漠々たる風景の中に、その姿がしだいに小さくなっていくのを、一軍の将士は何か心細い気持で見送った。

十日の間、浚稽山の東西三十里の中には一人の胡兵をも見なかった。

彼らに先だつて夏のうちに天山へと出撃した二師將軍はいったん右賢王を破りながら、その帰途別の匈奴の大軍に囲まれて惨敗した。漢兵は十に六、七を討たれ、將軍の一身さえ危うかったという。その噂は彼らの耳にも届いている。李広利を破ったその敵の主力が今どこのあたりにいるのか？ 今、因※將軍公孫敖が西河・朔方の辺で御いでいる。陵と手を分かった路博徳はその応援に馳せつけて行ったのだが」という敵軍は、どうも、距離と時間を計ってみるに、問題の敵の主力ではなさそうに思われる。天山から、そんなに早く、東方四千里の河南・オルドスの地まで行けるはずがないからである。どうしても匈奴の主力は現在、陵の軍の止营地から北方※居水までの間あたりに屯していなければならない勘定になる。李陵自身毎日前山の頂に立って四方を眺めるのだが、東方から南へかけてはただ漠々たる一面の平沙、西から北へかけては樹木に乏しい丘陵性の山々が連なっているばかり、秋雲の間にときとして鷹か隼かと思われる鳥の影を見ることはあっても、地上には一騎の胡兵をも見ないのである。

山峡の疎林の外れに兵車を並べて囲い、その中に帷幕を連ねた陣営である。夜になると、気温が急に下がった。士卒は乏しい木々を折取って焚いては暖をとった。十日もいるうちに月はなくなった。空気の乾いているせいか、ひどく星が美しい。黒々とした山影とすれすれに、夜ごと、狼星が、青白い光芒を斜めに曳いて輝いていた。十数日事なく過ごしたのち、明日はいよいよここを立退いて、指定された進路を東南へ向かって取ろうと決したその晩である。一人

の歩哨が見るともなくこの乱々たる狼星を見上げていると、突然、その星のすぐ下の所にすこぶる大きい赤黄色い星が現われた。オヤと思っているうちに、その見なれぬ巨きな星が赤く太い尾を引いて動いた。と続いて、二つ三つ四つ五つ、同じような光がその周囲に現われて、動いた。思わず歩哨が声を立てようとしたとき、それらの遠くの灯はフツと一時に消えた。まるで今見たことが夢だったかのように。

歩哨の報告に接した李陵は、全軍に命じて、明朝天明とともにただちに戦闘に入るべき準備を整えさせた。外に出て一応各部署を点検し終わると、ふたたび幕営に入り、雷のごとき鼾声を立てて熟睡した。